

松下幸之助記念財団 研究助成 研究報告

【氏名】 川口 悠子

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】 占領下の日本における原爆被害の言説とナショナリズム

【研究の目的】

戦後初期の日本社会では、広島・長崎の原爆被害はアジア太平洋戦争での日本人の被害体験を象徴する悲惨なできごとであるとする記憶のあり方は、まだ一般的ではなかった。しかし、広島・長崎の人々にとっては、原爆被害に立ち向かうことはまさに喫緊の課題であり、復興や被爆者の救援、そして世界平和を求める試みなどがおこなわれていた。いっぽう米国でも、原爆投下の是非や核兵器保有の在り方をめぐって議論が戦わされていた。

こうした状況の中で、広島の人々と米国の人々などが協力して平和運動や被爆者救援活動をおこなう動きが存在した。本研究はこれらの活動の実態を解明するとともに、活動の広島側の関係者と米国側の関係者とのあいだで、広島での原爆被害をめぐる言説が、一定の乖離をはらみつつも共有されていた状況を検討し、広島での原爆被害が本質的にナショナルなものではないことを指摘することを目的としている。とりわけ、中心人物のひとりとして日米両国で活動していた谷本清牧師(1909-1986)に注目し、彼が米国で活動することを可能にした社会背景を、キリスト教社会を中心に明らかにすることを目指すものである。

【研究の内容・方法】

谷本清は、広島市中心部にある日本基督教団流川教会で牧師を務めていた際に被爆した。戦後、ジョン・ハーシーのルポルタージュ「ヒロシマ」の登場人物として米国で高い知名度を得た谷本は、母校である、ジョージア州アトランタのエモリー大学(1937-1940 在籍)の同窓生らの助力もあって、米国のメソジスト教会(現:合同メソジスト教会)伝道局の招きで米国を訪問し、1948年10月から翌年末まで、1年以上にわたり米国各地を講演して回った。かねてより被爆者救援団体や平和運動団体を立ち上げることを構想していた谷本は、教会本部の公式な援助を得ることはできなかったものの、編集者・社会活動家として著名だったノーマン・カズンズらの協力を得て、まず、協力団体であるヒロシマ・ピース・センター・アソシエーツを1949年3月にニューヨークで、そしてヒロシマ・ピース・センターを1950年に広島で、それぞれ立ちあげた。以上のような谷本の活動や、それを支えた谷本の思想と経歴について、2009年11月の日本平和学会秋季研究集会(於:立命館大学)で報告をおこなった。

その後、2010年9月に米国にある文書館を三か所訪問し、史料収集に取り組んだ。まず、イェール大学バイニキー図書館(コネチカット州ニューヘイヴン)ではジョン・ハーシー文書を閲覧し、「ヒロシマ」の取材・執筆の際のメモや、その後ハーシーや谷本らのあいだで交わされた書簡などを収集した。また、合同メソジスト教会の文書館(ニュージャージー州マディソン)では、谷本の米国講演旅行関係の史料およびメソジスト教会の宣教活動・海外援助活動についての史料を精査した。エモリー大学では、留学中の谷本についての史料を調査するとともに、メソジスト教会の宣教・海外援助活動についての二次文献を渉猟した。以上の文書館調査に加え、キリスト教団体による平和運動や関係人物の経歴、また米国社会の原爆観に関するものなど、関連書籍を日米で購入して研究を進めた。

【結論・考察】

米国での史料調査の結果、メソジスト教会の組織構造や支援者たちの経歴などについての基本的な情報を得た。また、谷本が米国滞在中、メソジスト教会伝道局やエモリー大学関係者と密に連絡を取っていたことを、史料によって裏付けることができた。さらに、第二次世界大戦が世界各地に甚大な被害をもたらしたことを受けて、メソジスト教会が「キリストのための十字軍(Crusade for Christ, 1944-1948)」などの海外救援プロジェクトを進めていたことが明らかになった。谷本の活動がこうした教会プロジェクトと軌を一にしていたことで、米国訪問にあたって伝道局からの援助が得られ、また谷本に対する米国内での広汎な支持にもつながったものと考えられる。

今後は、貴助成金によるこれらの研究成果に加え、谷本の活動が広島地域社会ではどのように受け止められたのかを、占領下・冷戦初期という時代背景に即して検討し、広島と米国のあいだでの言説の共有と断絶について再度考察を加え、博士論文として提出する予定である。